

生涯学習情報誌

Life Learning

1 2018
Jan.
NO.329





日本が初参加したオリンピック、1912年ストックホルム大会にて、左から嘉納治五郎、大森兵蔵、旗手は三島弥彦選手。

あなたは今年、何を見つけますか？

生涯学習開発財団 理事長 松田妙子



ライフラーニングメンバーズの皆様、あけましておめでとうございます。

すでにご存知の方も多いと思いますが、来年のNHK大河ドラマ「いだてん」は、オリンピックが舞台です。日本が初参加した1912年のストックホルム大会から、日本初開催となった1964年の東京大会まで、52年間の苦楽の物語を、人気脚本家の宮藤官九郎さんが描きます。

そのストックホルム大会を監督として率いたのが、私の大

叔父である大森兵蔵でした。ドラマ「いだてん」では人気俳優の竹野内豊さんが兵蔵を演じてくださるそうです。大叔父は日本人の体躯向上を目的として、アメリカの大学に留学をし、新しいスポーツであるバスケットボールとバレーボールを日本に紹介したと言われています。そして、オリンピックを日本に紹介したと言われていきます。そして、オリンピック初参加を目指して、嘉納治五郎とともに大日本体育協会や日本オリンピック委員会を設立し、ストックホルム大会参加を実現したのです。

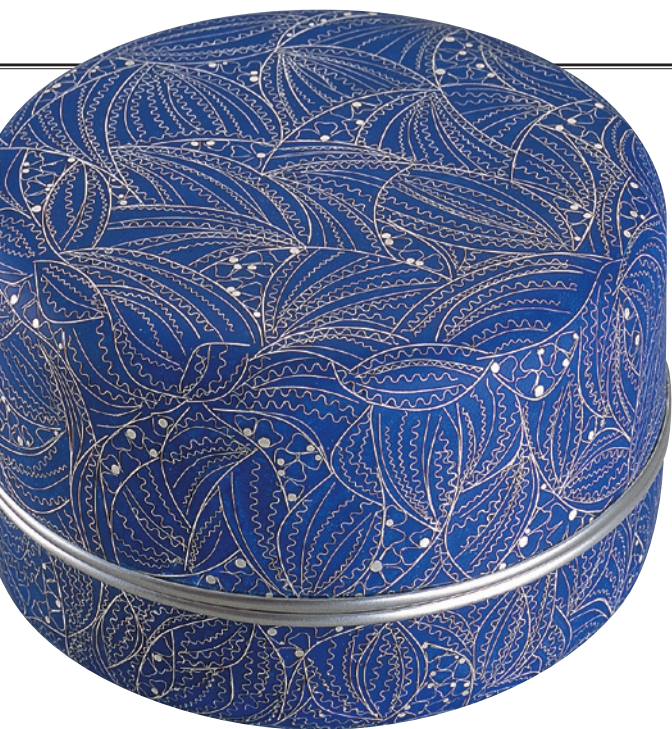
私は、今年の自身の課題として、日本初の新しいことに次々と挑戦し続けた大叔父に倣い、「何か新しいことを見つける」ことを決めました。いろんなことに興味を持って、初めての場所を尋ねたり、初めての人に会ったり、初めての学びをしてみたりと、何に出会うか今から楽しみです。

本情報誌では、日本の伝統工芸や季節の室礼など、日本に古くから伝わるものの魅力をシリーズで紹介してきました。一方で、新規性のある研究で博士号を取得された方々のインタビューや、新しい事業モデルで世の中を良くしていくとする社会起業家の生き方も紹介しています。古いこと、新しいことの両方を発信しているのは、両方ともに自分が気づかなかった新しい発見があるからです。

昨年の誕生日（本誌10月号）に申し上げた、ライフワイドな生き方を実践するためにも、感度の良いアンテナを立てて、私なりの新たな発見をしていきたいと思っています。

あなたは今年、何を見つめますか？

何度も何度も失敗して、七宝に新たな表現を生み出す



泥釉有線七宝合子「藍郷」(2009年)



有線七宝花瓶「華麗な」(2012年)

七宝 吉村英子

Yoshimura Yoko

1940年 神奈川県鎌倉市に生まれる
1959年 七宝制作の道に入る
1975年 第3回リモージュ国際七宝幻術展入選(フランス)
1976年 第1回個展開催(以後国内外で多数開催)
1977年 第24回日本伝統工芸展 初入選
1993年 世界の七宝作家23人展(フランス)
1994年 第41回日本伝統工芸展 日本工芸会奨励賞 泥釉有線七宝花瓶「花暦」
1995年 第42回日本伝統工芸展 日本工芸会奨励賞 泥釉有線七宝合子「花時々」
2003年 第23回伝統文化ポラ賞 優秀賞
2006年 グルジア国際七宝展入賞
2014年 日本伝統工芸展60回記念〈工芸からKŌGEI〉に出品
現 在 日本伝統工芸展特待者、NPO法人日本七宝会議理事長



有線七宝箱「花の詩」(2008年)



聞き手: 上野由美子(左)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

——独学だったそうですが、七宝との出会いは、中学生の時、父から誕生日に七宝焼の指輪をプレゼントされたのです。とにかく綺麗で、誰がどうやってこんな美しいものを作っているのだろうか、七宝への好奇心

七宝は、銀、銅などの金属地に釉薬で着色し、800℃前後の高温で焼成する。仕上がりとは鮮やかに発色し、ガラス状の硬い保護層ができる。その特性が生かされ、日本の勲章はすべて七宝で制作されている。日本最古の七宝は古墳時代末期の牽牛子塚古墳から見つかっているが、盛んになったのは16世紀末。明治期には並河靖之、濤川惣助、安藤重兵衛らが高い技術を競ったが、作品のほとんどは海外に流出している。吉村英子氏は師につかず独学で七宝に取り組んだ。染織、陶芸、ガラスなど他分野の技法を積極的に取り入れ、古い泥七宝の技法を活かすなど、自由で斬新な七宝表現を生み出してきた。

心が沸き起こったのです。

数年後、芸大に進んだ友人が授業で作った七宝焼を持っていたので、とっ捕まえて根掘り葉掘り聞いて、まずは道具と素材を揃えることから始めました。専門店でバーナー、ふいごなどを購入。釉薬の材料は父が輸入してくれて、乳鉢ですり潰して粉状にしました。とにかく何度何度も焼いて、何度も何度も失敗しました。先生がいなかったたので毎日様々な方法を試みました。この時期の姿勢が、染織や陶芸、ガラス工芸など他の分野の技法を取り入れた私独自の作風につながったと思います。

——作品にどのような生かされていますか。

美術評論家や七宝愛好家からも「どうやったの?」とよく聞かれます。通常は有線七宝といって、0.2〜1.5ミリの幅の帯状の銀を立てて貼って、囲まれたエリアに単色の釉薬を盛っていきます。私が開発した友禅七宝は、調合した中間色の釉薬を用い、下地に筆で直接絵柄を描いて、友禅染めや水墨画のような濃淡を出します。有線でも私の作品では、花びらなど数千ピースの銀線のパーツを用いることもあります。一つひとつ曲げてピンセットで貼っていくので根気が要ります。



泥七宝は光沢を押さえた釉薬で、落ち着いた表情を出しています。釉薬の質が悪かった昔の作風を、逆に味わいとして活かしました。他にも、わざと生焼けにしたり、銀粘土や箔を使ってみたり、最近では金の雲母とベネチアガラスを用いてみたりと、遊びながら実験しています。

——特に海外で評価され活躍されていますね。

七宝制作が軌道に乗ってきた1970年代に、パリやリモージュに行つて、作品展やお店をたくさん見ていたのですが、当時パリ市長だった、後の大統領シラク氏に手紙を書いたのです。そうしたらブローニユの森のお城



有線七宝水指「五運」(2014年)



泥釉有線七宝花瓶「花暦」(1994年)



泥釉有線七宝花瓶「連接」(2005年)

で展覧会ができることになり、大盛況でした。それがきっかけで北京にも呼ばれ、100人の作家に声をかけて企画。その後も、カナダ、アルゼンチン、アメリカなどに呼ばれ、出展や個展をやりました。今年4月には台湾で、日本、アメリカ、中国を加えた4か国の作家展を開催する予定で、審査員を依頼されています。

——七宝とは思えない作風の数々に引き込まれます。

リモージュに出すときに言われたのは、「日本人にしか作れないものを出してほしい」ということでした。国内でも三越や和光で個展をさせていただいて、「なぜ私に声をかけてくださるんですか」と聞いたら、「他の人がやってないことをやっているからですよ」と言われました。私の場合は、先生につかないで自由にやったことが良かったのでしょう。

先生に教わる代わりに、人とのつながりでたくさんのことを学びました。私の作品を使ってくださって、展覧会を15年支援してくれているお客様いますが、工芸に詳しくいろんな質問をされます。常に勉強しておかなくてはいけないし、人に伝える力もつきました。並河靖之さんの作品の復元を頼まれたときも、特殊なカメラで並河さんの作品を見たらすごいんです。当時は電気炉がなく炭火で焼成していた頃なのに、銀泉は細く0.3ミリくらいで、細かい絵柄のところに100色くらい使っていました。仕事からも学んでいます。

——若い人の育成はどうされていますか。

私の父はものづくりの道に進みたかったけど叶わなかったことから、私に対してすごく支援してくれました。今度は私が若い人を支援していかなければと思っています。私が理事長を務めている日本七宝会議は、2007年にNPO法人化して、主催する「国際七宝ジュエリーコンテスト」は今年で31回を数えます。若い人が、人とながつていける機会を提供したいです。

祝

2017年9月 放送大学博士号(学術)取得

神谷光信 さん(取得時57歳)

【論文テーマ】ポストコロニアル的視座より見た遠藤周作文学の研究…村松剛・辻邦生との比較において明らかにされた、異文化受容と対決の諸相

文学を通して、世界を美しくしていくための人間的な努力なのです

■遠藤周作の文学に横たわる人種主義への批判

「遠藤周作はキリスト教徒でしたが、代表作を読み直すと、根底には近代西洋の植民地主義や人種主義に対する怒りのようなものが横たわっていたというのが、本研究における私の主張なのです」

国際的にも有名で多くの著作が翻訳されているが、代表作の一つ『死海のほとり』は、韓国語以外には翻訳出版されていない。抑圧されるアラブ人を描いたシーンなどから、反ユダヤとの追及をされかねないと、出版社が気を遣ったものと思われる。

慶長遣欧使節の支倉常長がモデルの『侍』も代表作。藩命でローマを訪ねた武士が、やむなくキリスト教徒になるが、帰国後に切腹させられる。その旅の背景に、大航海時代の西欧がキリスト教を布教しながら、銃で原住民を迫害していく姿が描かれている。1980年に書かれ、歴史小説の形を取っているが、70年代までアフリカで実質植民地支配していた国々に残る問題を語ろうとしたと分析する。

■東日本大震災を機に放送大学大学院に入学

少年時代から文学好きで、自身はクリスチャンではないが、日本のキリスト教作家が好きだった。大学卒業時に父親が病気になる、大学院進学をあきらめて教員になった。そこそこ豊かで平和に暮らしていた50歳のとき、東日本大震災があり衝撃を受けた。震災や原発事故の中、まだ小さかった子どもたちが生きていくこれからの日本が、もっとしっかりしてくては。自分ができるのは、専門の文学を通して世の中に役立つこと。そのためには、もう一度ちゃん

と勉強し直さなきゃダメだと、働きながら可能な放送大学大学院に入学した。修士課程を卒業した2014年に博士課程が開講し、倍率は20倍以上だった。合格した1期生の一人に選ばれた。

修士論文は、遠藤とフランツ・ファノンという黒人のフランス人思想家を比較研究。着目したのは、二人が同じ時期にフランスで学生生活を送り、同じように白人から人種差別を受け、同じように白人女性と恋をし、同じような書物を読んでいたこと。ファノンはアルジェリア独立を支える革命家に、遠藤は小説家になったが、出発点において、人種主義や植民地主義への怒りと批判を共有していたのだ。

■博士になることの覚悟と看板

放送大学ではメインの指導教授の他に、サブの先生が2人付く。メインの青山昌文先生は美学・芸術



神谷さんは神奈川県立高校の教師。担当する国語の授業では、世界地図を使ったユニーク指導をしている。

学が専門、サブの2方は国文学と国際政治学の先生で、それらのゼミにも出させてもらった。そうした幅広い研究環境を得たことで、今までにない視点からの遠藤研究ができたと感じる。

「財団の助成金も受けられ、おかげさまで放送大学最初の博士4人の中に名前を残せました。絶対3年で取ると強い決意だったものの、口頭試問では論文の弱点をいろいろ指摘され、自分の体を切り刻まれる辛さでした。どれだけ厳しい世界に入るのか、学者になるという意味が骨身にしみしました」

博士号取得後、遠藤周作の関連書籍への執筆を求められた。「遠藤周作研究の神谷」という看板ができたこと、それだけ続けるわけではないが、博士号ってこういうことかと責任を感じている。

■実践美学としての文学の役割

「青山先生から、美には視覚的な美しさの他に実践美学という概念があり、人間の言動の美しさや、それぞれの立場で少しずつ世の中を美しくしていく姿勢が大切だと教わりました。今の世の中は、誹謗、差別、戦争など、美しさの対極にある地獄のような様相を呈しています。戦争の反対語は文学だという方もいます。敵対する国や民族それぞれの中にも平和的な活動家がいるように、図式的じゃないところで理解し合うためにも、文学とか映画の役割、存在価値があるのではないのでしょうか。」

これから博士号を目指す皆さん、人生は一度きりです。松田妙子理事長が発破をかけてくれますので、後悔しないようぜひ挑戦してください」